

歴史の窓

江戸時代の旅にみる日本文化

原 淳一郎

自らの旅の経験をもとに、多くの評論を残した森本哲郎氏は、「人間へのはるかな旅」(潮出版社、1971年)において、

日本が明治以来、たかだか百年の間に西欧に追いつき、いまや追い越そうとしているのは、いってみれば、この〈能率〉への忠誠心のたまものでした。しかし、その能率が、およそ関係のない分野にまで、のさばり始めたのです。能率が人間生活のいっさいの目的概念を蚕食してしまったのです。だから、レジャーのすごしかた、観光旅行の日程までが、能率化されるハメになってしまいました

と評した。

この批評は、旅研究の成果からみれば、やや根拠が薄弱である、と言わざるを得ない。だが、見方を変えれば、江戸時代におけるルート選択から浮き彫りになる〈能率〉的な旅人の行動が、明治以降の西洋的・近代的な〈能率〉の受容に一役買っている、という主張が成り立つのではないだろうか。

江戸時代の旅は、ゆるやかでのんびりしたものと思いがちだが、決してそうではない。きわめて合理的であった。何故なら、農耕を主軸に据えて思考されていたからだ。たとえば、東北地方からの伊勢参宮者は、ほとんどが冬に出立した。これは冬期に農耕が不可能である、ということにも起因する。それでも、寒気凜烈、雪の降り止まぬ時期にわざわざ出かける必要はないような気がする。まして日本海側の住人は、

太平洋側へ抜けるために、まず峠越えを強いられる。夏なら1日で越えられる峠道に2、3日も要するのである。では、何故そうせざるを得ないか。それは、たとえば苗代作りの少し前に、絶妙なタイミングで戻ってこなければならぬからである。伊勢参宮に要する日数は、村の先人の教えや記録によって概算できる。そのため、先人の辿った道をなぞるような形で旅をすることが求められたし、それが安心感にもつながっていた。おそらくは、旅の費用と相談しながら、バランスをとった結果なのだろう。

ここで伊勢参宮を、宗教学的に分析してみよう。

出発から(時に出発前の精進齋儀礼も含めて)帰宅まで、全体を覆いつくす「聖」なる時間と空間と、その全体性のなかにおける細かい「聖」と「俗」の連綿たる交替が日本の巡礼の特徴である。

西洋の場合、巡礼は、基本的に一つの聖地をめざすものである。いわば直線的なイメージである。一方、日本の巡礼と参詣は、最終目的地があるものの、その巡礼路の構成要素一つ一つに等価値が付与されている。したがって、円を描くような行程をたどることが多い。その最たるものが、西国巡礼と四国遍路ということになるだろう。

つまり、仮に最大の目的地が伊勢神宮であったとしても、その巡礼路も同じような価値をもっている、ということになる。実際、伊勢参宮には、往路・復路ともに、多くの有名寺社への参拝が組み入れられていた。

ただ一つ、こうした構造を成り立たせる

条件がある。それは融通無碍な「聖」観念である。西洋であれば、「聖」なる空間は、かっちりとした構造物によって固められ、境界線が明白に敷かれる。しかし、日本では、その境界は、視覚的にじつに曖昧である。中には何も無いにもかかわらず、注連縄一つで「聖」なる空間に仕立てられる。

同様なことは異界観念にも言える。『古事記』で、イザナギが黄泉国までイザナミを追いかけていき、鶴の恩返しのような目に遭い、この世に帰還する。あるいは、レヴィ＝ストロースが『神話論理』に近親相姦の事例として取り上げた唯一の日本神話、つまりスサノヲが、父イザナギの「海原を治めよ」との言に背き、姉のアマテラスのところまで行き、甘え、やりたい放題に振舞い、暴れる場面などからみても、異界との自由な往来が、文献上で追える範囲での古来の異界観念である。こうしたことは、ゾロアスターやアブラハム三兄弟のように、善と悪、心と身体、聖と俗、天国と地獄などの二元論を根底に持ち合わせている場所では、成り立つ話ではない。

筆者の好きな言葉に「不二」という言葉がある。そして東洋的思想なるものがあるとするれば、これこそが、それを端的に言い当てている言葉だと思う。「不二」とは多義性を有する言葉だが、ここでは、すべてのものは完全に二つに分けることができない、と解釈しておきたい。これは仏教の経典に頻繁に使用される言葉だが、むしろ『莊子』で理解する方が近道だろう。『莊子』には、「胡蝶の夢」「万物斉同」「大鵬」などの話があり、美と醜、貴と賤などは所詮人間が作り出した概念であって、すべてのものは根底ではつながっているため、そのような見せかけに振り回されることは無駄である、というのが大意である。太極図の思想的源泉も同様である。

樋口裕一氏は『ホンモノの思考力』（集

英社、2003年）で、日本人の著作の論理性不足を批判し、その原因の一つに、「二項対立的な思考」の欠如を挙げている。樋口氏はこれを日本人の欠点としているわけだが、この曖昧さこそ、日本文化を読み解く鍵である。

このことを前提にして、改めて江戸時代の巡礼や参詣の旅を考察してみよう。日常生活に対する非日常的な旅という大きな「聖」の天蓋のなかで、「聖」なる寺社参拝と、「俗」なる物見遊山を繰り返しているのであるが、その「聖」と「俗」の境目は、厳密に区別することができない。そして、その大いなる天蓋さえも、成年式の意味を帯び、あるいは、代参講で村の代表者としての使命を全うしなければならないという責任感を抱くなどすれば、「聖」と「俗」との区別は、ますます困難なものになる。本来、「聖なる天蓋」では、日常の秩序や約束ごとがひっくり返され、人びとは日常の束縛からの解放感を味わえるはずである。『徒然草』第十五段に

いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、目さむる心地すれ。そのわたり、ここかしこ見ありき、ゐなかびたる所、山里などは、いと目慣れぬ事のみぞ多かる。都へたよりもとめて文やる、「その事かの事、便宜に、忘るな」など言ひやるこそをかしけれ。さやうの所にてこそ、万に心づかひせらるれ。持てる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺・社などに忍びてこもりたるもをかし

とあるような、境地に到るはずのものでもある。しかし、そこでは、もはや「自律」ではなく「義務」があり、まるで秩序を改めて確認させる「儀礼・儀式」のような構

造を露呈している。

このような曖昧さこそが、聖地そのものだけでなく、その経路にも等価値を与えた。そして、時間的・季節的制約をともなっているゆえに、日本の旅は、経路に多くの寺社参詣を組み込み、無駄のない合理的な巡

礼行動として、磨かれていくこととなったのである。

(はら じゅんいちろう
米沢女子短期大学 准教授)